

---

# 幸せな贈り物

MUKKU

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸せな贈り物

### 【Nコード】

N1397V

### 【作者名】

MUKKU

### 【あらすじ】

新一と蘭が結婚してから半年、新一が事件を解決して帰る途中、新一のもとに園子から蘭が倒れたと連絡が入る。

秋の終わりのある日の朝、米花町の2丁目にある工藤邸の家主、工藤新一が朝食を食べていると携帯が鳴りだした。

新一がそれに出ると電話の相手は目暮警部で、いつも通り事件の依頼だった。

「わかりました！すぐ伺います…」  
と言って電話を切った後、新一は半年前に結婚したばかりの妻、蘭に、

「蘭、オメーも来るか？」  
と聞いた。

蘭は新一のパートナーとして忙しくないときはよく新一と一緒に事件現場に来ているのだ。

蘭が、  
「大学あるし、今日はよしておくよ…」  
と答えると新一は、

「そうか…最近オメー体調あんま良くなさそうだしな…大学もあんま無理すんなよ！」  
と心配そうに言った。

新一の言う通り最近蘭は少し体調が優れないのだ。  
心配する新一に対して蘭は笑顔で、

「大丈夫！！無理しないから！新一こそ、あんまり事件ばっかで大  
学行かないでると単位とれないわよ！！」  
と言った。

蘭のセリフに新一は苦笑しながら、  
「その辺は考えてるから大丈夫だよ！」

と答えた後、蘭の頭にポンと手を置いた後、  
「じゃあ、行つてくる！！」

と優しく言つて、蘭の、

「行つてらっしゃい!!」  
という言葉聞きながら家を出て行った。

その後新一が無事事件を解決し、高木刑事と佐藤刑事に送られて大学へ向かっているると、新一の携帯が鳴りだした。

新一が携帯のディスプレイを見るとそこには『鈴木園子』と表示されていた。

新一が、

「もしもし…」

と出ると、

『もしもしじゃないわよ!!アンタねえ!!奥さんが大変なときに何してんのよ!!』

という園子の怒鳴り声が聞こえた。

「ら、蘭に何かあったのか!？」

と新一が焦って聞くと園子は、

『蘭が倒れたのよ!!今、救急車で運ばれてるところ!!だからアンタも早く来なさい!!』

と答えた。

「な、何!?!どこの病院だ!？」

と新一が聞くと園子は、

『米花総合病院よ!!わかったならとにかく早く来て!!』  
と言って電話を切った。

電話が切れた後、新一は運転している佐藤刑事に、

「行き先を米花総合病院に変えてください!!」

と焦った様子で言った。

「な、何かあったのかい?」

と助手席にいる高木刑事が聞くと新一は、

「蘭が倒れたそうです…」

と青い顔で答えた。

新一の答えに佐藤刑事は、

「たいへんじゃない！！すぐに米花総合病院に向かうわね！！」  
と言って、サイレンを鳴らしてスピードを上げた。

「ちよっ…ちよつと佐藤さん！事件でもないのにサイレン鳴らすのはマズいんじゃない？」

と高木刑事が焦りながら言つと佐藤刑事は、

「高木君！しゃべってる舌噛むわよ！！それに蘭ちゃんが倒れたなんて緊急事態じゃないそんな細かいことに構っちゃいけないわ！！」

と言ってさらにスピードを上げた。

米花総合病院に着いた新一が急いで病院に入ると待合室に園子がいた。

「園子！！蘭の様子は？」

と新一が開口一番に聞くと園子は、

「安心して、軽い貧血だって…今、点滴打ってるけどそれが終わったら帰っていいってさ！！」

と答えた。

「そっか…」

と新一がホッとした表現で言つと園子はニヤツと笑って、

「さあさあ…ダンナなんだから早く奥さんトコ行ってやんな！！」  
と言った。

新一は園子の表現を見て、

(コイツがこんな顔するときには何か裏があるな…)

と思いつつも蘭のことが心配なのでそのことには触れず、園子に蘭の病室を聞いてそこに向かった。

新一が蘭の病室に入るとのに気付いた蘭が、

「あっ、新一…」

と言って起き上がるうとするのを新一が慌て、

「具合悪いんだからムチャすんなよ！」

と制止すると蘭はクスリと笑って、

「このくらい大丈夫だよ……」

と言った。

「けどよー……」

と新一が未だに心配そうにしていると蘭は、

「わたしのことより新一、事件は？」

と聞いてきた。

「ああ、バツチリ解決したぜ!!」

と新一が笑いながら言うと言は、

「そう、良かった……」

と言った。

その後、蘭はとても優しい表情になって、

「わたし……すごく幸せなんだ……」

と言った。

「妻が倒れたって聞いたなら急いで駆けつけるのは当たり前だろ？」

と新一が言うと言は、

「それも幸せだけど、それだけじゃなくて……新一はもうすぐお父さ

んだよ……」

と笑顔で言った。

蘭のセリフに、

「……へ？」

と新一が呆けた声を出すと蘭は、

「だから……!! 新一はもうすぐお父さんになるんだってば……!!」

と少し強めに言った。

「それってまさか……」

と新一が言うと言はとても幸せそうな顔をして自分のお腹に手を当てて、

「ここに赤ちゃんがいるの……もう3ヶ月だって……」

と言った。

「オレと…お前の子か？」

と新一が言うと蘭はムツとした顔で、

「アンタ以外に誰の子なのよ…？」

と言った。

新一は、

「だよな…って、そうじゃなくて…！」

と少し混乱した様子で言った後、

「蘭！！ありがとう！！すっげー嬉しい！！！」

と蘭をギュツと抱きしめながら言った。

「キャツ！チヨット新一！お腹に赤ちゃんいるんだってば…！」

と抱きしめられた蘭が慌てて言うと新一は、

「ああ、そうだった…！」

と言って蘭をはなした。

新一が蘭を放した後、

「新一、わたしにありがとうって言うてくれたけど、お礼を言うのはわたしの方だよ…だって新一のおかげでこんなに幸せな贈り物が手にはいったんだから…！」

と少し照れくさそうにでもとても幸せそうな表情で言った。

新一は本当に愛情の籠もった表情で蘭のお腹に触れて、

「お互い学生でいろいろたいへんだろうけど…何があってもぜって

ーオレが蘭とお前のお腹ん中にいる赤ん坊を守るから…！」

と言った。

新一のセリフに蘭はとても幸せそうに笑って、

「うん！！わたしも新一のこともお腹の中にいる赤ちゃんのことも何があっても絶対守るからね！」

と言った。

そのあと2人は優しく微笑み合い、そっとお互いの唇を重ねた。

(後書き)

本編で書いていなかったんですが、最近の蘭の体調不良は妊娠のせいで、病院での園子のニヤツと表情は病院に運ばれた蘭と一緒に医者にそのことを聞いていたからです。

こんな所での蛇足説明ですみませんでした。

ちゃんとそういうことも本編で解るようにしないと…。

リクエストしてくださったWISHO2さんありがとうとついでに  
しました!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1397v/>

---

幸せな贈り物

2011年10月9日19時11分発行